

「鳴り砂」の圧殺

橋本 萬平

今から30年近い前である。本多勝一さんから突然の手紙をもらった。京都大学探検部の雑誌『探検』に、「鳴り砂」の事を書けとの要求である。

わたしは京都大学はでたけれども、この大学に探検部があるということすら知らない。ただ本多さんが『朝日新聞』に連載された『アラビアの遊牧民』の中にでていたアラビアの砂の美しい顕微鏡写真を見た瞬間、これは「鳴り砂」だと直感した。そこで本多さんに、この砂は鳴るかどうかの質問の手紙を出した。すると直ぐに「鳴り砂」に関して何か書けとの連絡である。

終戦を舞鶴海軍機関学校（当時は海軍兵学校舞鶴分校）の文官教官として迎えた私は、する事もないままに、地理的に近い網野の琴引浜の「鳴り砂」の研究を始めた。

昔から知られている「鳴り砂」に、関心を寄せた物理学者は幾人かある。当時の東京高等商船学校の栗原嘉名芽、京都大学の山下敬治たちである。然し戦前の実験器具の未発達の時代には、十分な研究ができないままにそれらの人たちは学術論文として発表していない。

戦後、電磁オシログラフを入手した私は、砂の鳴る音の波形の写真をとりいろいろな事がわかったが、最後のつめである砂の運動と音の振動数との関係の実験ができなかつたので、論文は書かず、一応「鳴り砂」の紹介を『科学の実験』誌に四回に渡って書いておいた。昔からの研究者、新聞、雑誌は、すべて「鳴り砂」の言葉を使っている。

ところがどうしたわけか、最近突如として「鳴り砂」の言葉が消えて「鳴き砂」として盛んに使用され始めた。マス・メディアもすべて「鳴き砂」の合唱である。どうやら誰かが自己宣伝のために、マス・メディアを利用したらしい。

そのためであるのか、この砂を語るときには、今までの研究とか先学のことには一言も触れようとしない。触ると、「鳴り砂」という正しい名前を出さねばならないからであろう。新聞も今まで「鳴り砂」として特集まで組んでいたのに、過去のことは全く忘れ去ってしまって「鳴き砂」一色である。

勿論言葉は生きものである。いろいろな事情で変化する事があるのは当然である。然し「鳴り砂」を「鳴き砂」に変える理由は全くない。「鳴く」のは発音者が自発的に行う行為であり、「鳴る」のは他からの行為によって生じる音である。「鳴り砂」は決して自分では発音しない。その上を歩くか、容器に入れて棒で掻く事によって、初めて音が出るのである。従って「鳴く」のではなく「鳴る」のである。「鳴き砂」では全く意味がない。

『毎日新聞』は最近（一九九〇年六月一日）まで「鳴り砂」で記事を書いていた。その紙面によると「鳴り砂」の浜のある所（網野、仁摩）では保存会があり、「鳴り砂を守る会」と「鳴り砂」を名称に使っている。これが昔からの名であり正しい使用法である。しかし今その土地では、「鳴き砂」の名があまりにも有名なのと命名者への遠慮があって、どうしたらよいのか苦慮しているという話も聞いた。

こんな誤った名が通用しているのは、マス・メディアの罪である。すべてのマス・メディア、新聞やテレビが、この名を使って大きく宣伝しているために、大衆はこれが正しい名と思っている。是正する場を持たないために嘆いている。古い正しい名を変化させて学問まで曲げてしまっているマス・メディアは、実に恐ろしいとつくづく感じざるを得ない。

（はしもと まんぺい・神戸大学名誉教授）

週刊金曜日 1994.2.25 第15号 より